



令和8（2026）年5月20日

## 校長だより Vol.3

### 「同じ星を見て歩いていきましょう！R8③」 ～「再編」を我々の「進化」の原動力に変える～

中間試験を控えたこの時期、校内には活気と共にどこか落ち着かない空気が流れているかもしれません。それは、先日行われた静岡県地域協議会で、本校が「適正規模にない」ために、再編の対象となったことを、報道等ではじめて知った生徒や保護者各位に、少なからず動揺が走っているからだと思います。今回は、この問題について私なりの考え方を述べて、みなさんと以下について共有したいと考えました。

#### 1. 「適正規模」という物差しと、私たちの「価値」

今回指摘された「適正規模」とは、あくまで人口動態に基づく行政上の「数字」の判断となるものですので、「少子化」という大きな社会情勢の波の中で、制度上の枠組みが変わることは避けられません。

しかし、ここで強調したいのは、「規模の適正化」は、決して「清水西高校の教育活動の否定」ではないということです。これまで私たちが積み上げてきた、生徒一人ひとりに寄り添う指導、地域に根ざした活動、そして清水西高ならではの温かな校風。これらは数字で測れるものではないからです。

再編の対象となりましたが、私たちがこれまで培ってきた価値は1ミリも損なわれはしません。

#### 2. 「今、ここにいる生徒」がすべて

再編という言葉を聞くと、どうしても「数年後の不在」に目が向き、無力感に襲われることはあるかもしれません。しかし、教育の本質はどこにあるべきか。それは、常に「今、ここ」にあるべきです。

3年後、5年後に学校の形が変わる可能性があるとしても、今日教室にいる生徒にとっては、清水西高校は、人生で唯一無二の掛け替えのない学び舎です。彼らにとって、再編のニュースは不安材料でしかありません。だからこそ、私たち大人が動揺を見せてはいけないと思います。

大切なのは、「学校がどうなるか」ではなく、「生徒がどう育つか」です。

私たちの情熱が揺らぐことはあってはなりません。むしろ、こうした状況だからこそ、「清水西高で学べて本当に良かった」と卒業生全員に胸を張って言わせたい。

それが、私たちの誇りであり、西高のブランドの証明になるのではないのでしょうか。

#### 3. 歴史の目撃者ではなく、創り手として

清水西高校は長い歴史の中で幾度も変化を乗り越えてきました。

私は、今回の再編の議論を「衰退」ではなく、新しい時代の教育を模索する「進化のプロセス」と捉えました。たとえ枠組みが変わったとしても、私たちがここで育んだ「清水西高スピリット（魂や気概）」は、必ずや次の形へと受け継がれていきます。

私たちは今、一つの時代の節目に立ち、次世代の教育を形作る重要な役割を担っています。

ですから、先生方の専門性と生徒への深い愛情を、これまで以上に発揮していただきたいと思います。

「清水西高には、この先生たちがいる」。その安心感こそが、生徒たちの最大のモチベーションになる。

私は校長として、先生方が安心して教育に専念できるよう、県や地域に対しても、本校の価値を正当に主張していきます。出来る限りのことを尽くして、最善の道を模索し続けます。

今年度清水西高で働けるメンバーは、この先も同じではありません。まさに『一期一会』の縁なのです。

目の前の生徒の笑顔のために、『幸福』のために、前を向いて、**同じ星を見ながら歩いていきましょう！**

## 「同じ星を見て歩いていきましょう！R8④」 ～「あいさつ」がひらく、西高の「新たな扉」～

昨年度、私たちは「式」という節目を重んじ、生徒が主体となった行事をとおして、成功までの過程（プロセス）を学ばせながら、『成し遂げる』経験をより多く積ませることに力点を置いてきました。

青春の証でもある部活動では、「未見の我（まだ見ぬ自分）」に出会うべく、真剣勝負の場を大切にしてきました。その積み重ねが、確かな「力」となって現れていることを感じています。

### 「眼の色」が変わった、その先へ

最近、校内を歩いていて感じるのは、生徒の「眼の色」の変化です。

部活動に打ち込む姿、行事に臨む真剣な表情。そこに「勝ち負け」を超えた、自分自身を研ぎ澄まそうとする意志を感じ、私は非常に嬉しく、そして、誇らしく思っています。

今年度、先生方に徹底をお願いしている「礼儀正しい挨拶（あいさつ）」ですが、昨年の今頃と比べ、なんだか学校が明るく活気に満ちているのを感じませんか？  
あいさつは単なるマナーではありません。相手の存在を認め、自分の心を開く「勇氣」の証です。この明るさこそが、今の清水西高の勢いそのものになります。



### 「褒める」ことで、「あたりまえ」は変わる

さあ、ここからが本当の勝負です。姿勢を正して、服装を正して、立ち止まって、相手の目をしっかりと見て「あいさつ」が出来た。大きな声で自分を名乗り、職員室に入室できた、御用聞きが出来た等々…。

こうした、言ってみれば、『あたりまえ』が変わったときほど、わざと大袈裟に褒めてみてください。顔を見て、場合によっては駆け寄ってあげて、タイミングを外さず『イイね！』を直に伝えてください。褒められることで、その生徒は間違いなく、『よし、次もやろう！』と思うはずです。

私たち教員側に、生徒の進化の過程（プロセス）に寄り添う習慣がありさえすれば、『あたりまえ』のレベルは、みるみるうちに上がります。ポイントは、『褒めてほしい時を外さずに、褒める』ことです。

### 「変わった」という自信を、さらなる「変容」へ

私たちは今、自分たちの手で学校の雰囲気を変えられることを証明しています。

しかし、ここで満足して立ち止まってしまうのはもったいない。

現状に甘んじることなく、この活気を「内実の伴った充実」へと昇華させていきましょう。あいさつの先に、深い対話はあるか。真剣な取り組みの先に、他者への想像力はあるか。形が整ってきた今だからこそ、その中身（質）を問い直したいのです。



### 共に「進化」の当事者として

あいさつ一つで学校を変えられる私たちは、どんな変化も「進化」のエネルギーに変えられるはずです。小さな変化（サイン）を見逃さず、『良い』時には、『これで良い』。逆の場合は、『ダメ出し』ではなく、生徒が行動改善出来るようになるまで、根気強く内面に訴えかける指導・支援をお願いします。そうしたことが定着すれば、学校風土は力強く健全に培われ、伝承してもいけるものとなります。

だからこそ、もっと欲張ってください。生徒は必ず変化（進化）します。「昨日までの自分」を軽々と超えていく逞しい生徒、そして、もっと活気あふれる清水西高を共に創っていきましょう。

高校時代が、上手いこうがそうでなかるうが、そこは大きな問題ではありません。自分の物語は自分にしか描けません。だから、今の自分を必死に超えようと、もがく自分でいられることの方が大事なのです。不格好でも構いません。むしろ、そんな風にまっすぐに頑張れる人の方が格好いいことを伝えたい。私は、挑戦し続ける生徒や先生方を、誰よりも近くで、そして、誰よりも熱く応援し続けます。